

# なゆたん通信

燐

書籍レビュー第二弾

第69号 令和8年2月9日発行

## 「自閉症の子供は方言を話さない」という噂は本当か？ 研究から見てきた子どもが言葉を学ぶときのプロセス

### 注意

今号では子どもの言語取得に関する研究の紹介をしています。  
ある子どもが自閉スペクトラム障害かどうかを話し言葉から  
判定する方法を記載しているわけではありません

みなさんは普段の生活で方言をどのくらい使用していますか？  
今回は方言とその使用状況に関する調査をきっかけとした興味深い研究を紹介します

### 聞き捨てならない噂をきっかけに…(1～3章)

今回紹介する書籍『自閉症は津軽弁を話さない』は障害児心理を専門とする臨床発達心理士の「松本敏治(まつもと としはる)」先生による自閉スペクトラム障害(Autism Spectrum Disorder, 以下ASD)の子ども達の言語習得に関する研究をまとめたものとなっています。

ある日、同じく臨床発達心理士として乳幼児健診に携わっていた妻の今泉先生(旧姓)が唱えた『自閉症の子は津軽弁を話さない』という説をにわかには信じられなかった先生。この話題をめぐって夫婦喧嘩にまで発展してしまったことをきっかけに、本格的な調査に乗り出します。

はじめは周囲の同業者や、松本先生の講演会に参加した人への聞き取りから調査をはじめ、徐々に規模を広げていき、最終的には全国各地からのデータを得ることができました。その結果、ある地域の子どもたちについて、定型発達(Typical Development, TD)、知的障害、そしてASDに分類した時に、TDや(知的障害はあるが)ASDではない子よりもASDの子たちの方が方言を話さない傾向にあるということがわかりました。さらにそれは、どうやら津軽弁が使用される北東北地方に限らず全国的にその傾向があったのです。



### 地域特有の話し方

なにしてるの？

なにしとん？

### 方言語彙

ごみをすてる

ごみをほかす

松本先生は方言に関してその地域独特の「話し方」をしているかどうかの調査だけでなく、その地域の名詞や助詞といった「方言語彙」の使用率についても調査しました。その結果、やはり方言語彙についても同様にASDの子たちはそうでない子たちに比べて使用していない、という傾向が見えてきたのです。

# なゆたん通信 燐

## なぜASDの子たちは方言を話さない？ うかびあがったある仮説（5章）

「ASDの子たちは方言を話さない傾向にある」という調査結果を学会や研究会、学会誌で報告したところ、多くの研究者の関心を惹き、なぜそういった傾向があるのかということに対する仮説もあつまりました。研究者たちによる解釈・仮説を大別したとき、ある有力な仮説が提唱されました。それが、

「ASD児は身の回りにいる人たちとの会話よりも、  
テレビ・ビデオ・絵本などの  
共通語で制作されたメディア媒体から言葉を学んでいる」説（メディア影響仮説）

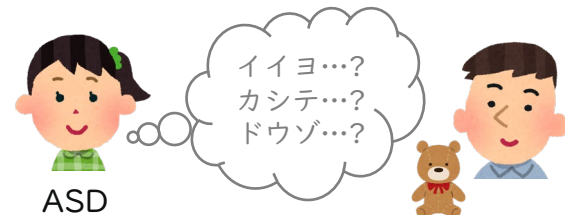
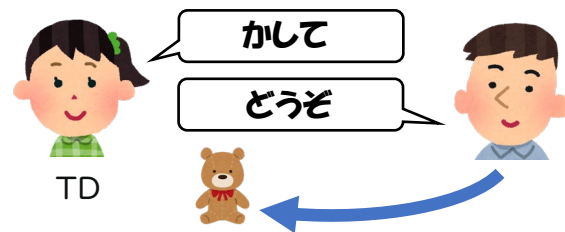
というものです。いくつかの仮説のうち、これがASD児が方言らしい「話し方」をしていない事と、方言語彙を使用しない事の両方を説明できそうな唯一のものでした。松本先生は、この仮説を軸にして考察を進めます。

### メディア優位なASD児たち（8～10章）

現在、精神医学の分野において、ASDとは相手の気持ちを察するといった社会的な機能についての先天的な障害であるのだと考えられています。そして、言葉の遅れなどは社会性の障害によって二次的に起きている障害であるという事なのだそうです。（8章）

TDの子どもたちは、大人たちが話す言葉の心理状態も理解することが可能であることに比べ、ASDの子たちはそうした言葉の裏の背景まで理解することが困難であり、その結果、意図の理解を伴わない機械的な学習によって言語を取得していると考えられます。

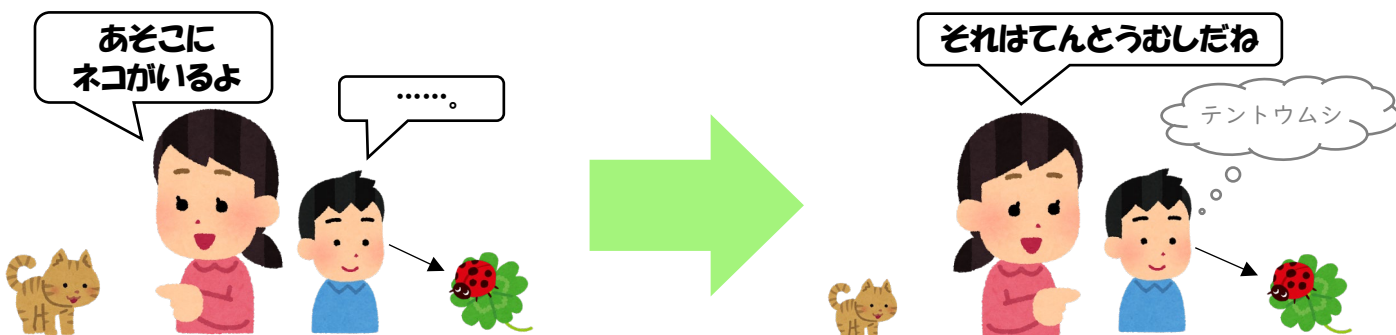
こうした一面と「限定した興味」「反復行動を好む」といった特性も相まった結果、その時々によってニュアンスの変化するおうちの人の言葉を真似するよりも、なんども観直し、読み直せる（そして毎回全く同じ）メディアの内容を暗記する方が得意になるのではないか、という考えに至ります。



ASDの子たちは言葉を音の集まりとして覚えることは出来ても、意味までは理解できていない場合がしばしばある

### ASD児のコミュニケーションによる言語習得は？（10章）

ASD児がテレビ・ビデオ・絵本などから言語を習得しやすい傾向があるという分析が行われましたが、本書ではその後、他人とのコミュニケーションを通しての言語取得に関しても触れています。ASDはその社会的な特性により、他人が注目しているものに一緒に注目する、いわゆる「共同注意」が成立しにくいとされています。このため、大人がASD児に「あれは猫だよ」と言って道端を指さしても、なかなかそちらを見てくれません。しかし、子どもが自ら注目しているものに対して、横から大人が「それは、てんとうむしだよ」と教えることにより、疑似的な共同注意が成立し、子どもも（ああ、これは“テントウムシ”っていうんだな）と結びつけることができる、と解説しています。



# なゆたん通信 燐

## まとめ・本書の魅力

本書は、「自閉症の子は津軽弁を話さない」という噂をきっかけにASD児の言語特性と、なぜそうなるのかという分析をASDとそうでない人々の認知特性の違いなどから詳しく解説しています。また、方言というものがもつ機能(4・6章)調査の中で見えてきた、ASDの子どもをサポートする人たちの関わり方についての興味深い特徴(14章)などにも触れられています。さらに、今回のなゆたん通信ではASD子どもたちの言語に関する内容を紹介しましたが、書籍ではそれに加え、ASD児が成長した

センセーショナルなタイトルが興味を惹く本書は、実際にASD児(者)に関わる人たちの間になんとなくあった実感を裏打ちしてくれる調査結果を報告してくれます。

またその上で、ASD児(者)とのコミュニケーションを発展させるためのヒントも多く紹介されています。身近にASDの人がいる方・仕事でASDの人に関わる方にとっても参考になる書籍であると感じました。ぜひ読んでみてください。

## シリーズラインナップ 続編も発売されています

単行本版



文庫版



こちらの文庫版をなゆたの書庫  
「ソルの小さな図書室」にも置いています！  
興味のある方はお読みください。

